

令和3年度作品集

平和 コンクール



第21回平和絵画コンクール最優秀賞 釧路市立愛国小学校4年 村井 咲月 さん

釧路市平和都市推進委員会

目 次

第 2 1 回平和絵画コンクール

最優秀賞	愛国小学校 4 年	村 井 咲 月	1
優 秀 賞	鳥取西小学校 5 年	山 根 悠 聖	
優 秀 賞	湖畔小学校 4 年	佐 藤 真 弘	2
優 秀 賞	愛国小学校 2 年	宮 崎 由 奈	
優 秀 賞	共栄小学校 2 年	大 平 汐 來	3
佳 作	釧路小学校 6 年	上 瀧 奈 央	
佳 作	湖畔小学校 5 年	阿 部 晃 大	4
佳 作	湖畔小学校 5 年	門 間 大 明	
佳 作	共栄小学校 4 年	北 田 澄 怜	5
佳 作	釧路小学校 3 年	三 宅 菜 月	
佳 作	共栄小学校 2 年	中 嶋 優 月	6
佳 作	愛国小学校 1 年	岩 山 勇 翔	

第 3 4 回平和図書読書感想文コンクール

最優秀賞	北海道教育大学附属 釧路義務教育学校 9 年	樋 渡 俊 翔	「戦禍の真実は体験談にあり」	7
優 秀 賞	北海道教育大学附属 釧路義務教育学校 9 年	舟 木 梨 恵	輝く明日	9
優 秀 賞	北海道教育大学附属 釧路義務教育学校 9 年	星 こころ	本当の人間に	11
優 秀 賞	北海道教育大学附属 釧路義務教育学校 9 年	高 橋 仁 子	普通があたりまえでない時代	13
佳 作	北海道教育大学附属 釧路義務教育学校 9 年	成 田 くれあ	私達が伝えるべきこと	15
佳 作	北海道教育大学附属 釧路義務教育学校 9 年	菅 野 綺 子	後世に伝えていくべきリアルな事実	17
佳 作	北海道教育大学附属 釧路義務教育学校 9 年	村 田 拓 海	「原爆と日常」	19
佳 作	北海道教育大学附属 釧路義務教育学校 9 年	岡 林 紀 花	十四歳の命	21
佳 作	音別中学校 2 年	吹 矢 煌 晟	幸せの崩壊	23
佳 作	景雲中学校 2 年	札 遥 奈	『この世界の片隅に』を読んで	25

第 2 0 回平和の主張コンクール

最優秀賞	釧路江南高校 1 年	藤 澤 輝 煌	戦争について考え、理解する	27
優 秀 賞	釧路江南高校 3 年	寺 後 彩 葉	想像と明日	29
優 秀 賞	釧路江南高校 2 年	小 関 廉	私達ができること	31
優 秀 賞	釧路北陽高校 2 年	畑 理 子	「平和」について思うこと	33
佳 作	釧路江南高校 2 年	大 場 康 永	唯一の被爆国が平和のためにできることとは	35
佳 作	釧路江南高校 2 年	虻 川 朝 花	平和について思うこと	36
佳 作	釧路北陽高校 2 年	鈴 木 唯 花	私たちの未来のために	38
佳 作	釧路江南高校 2 年	増 田 太 陽	自分の考えをもつということ	40
佳 作	釧路江南高校 2 年	黒 田 栞 那	利用される核兵器	41
佳 作	釧路江南高校 2 年	斎 藤 静 流	平和とは	42



第21回平和絵画コンクール
最優秀賞（釧路市平和都市推進委員会委員長賞）愛国小学校4年 村井 咲月



第21回平和絵画コンクール
優秀賞（釧路市議会議長賞）鳥取西小学校5年 山根 悠聖



第21回平和絵画コンクール

優秀賞（釧路市教育委員会教育長賞）湖畔小学校4年 佐藤 真弘



第21回平和絵画コンクール

優秀賞（釧路青年会議所理事長賞）愛国小学校2年 宮崎 由奈



第21回平和絵画コンクール
 優秀賞（釧路ユネスコ協会会長賞） 共栄小学校2年 おおひら せな 大平 汐來



第21回平和絵画コンクール
 佳作 釧路小学校6年 こうたき なお 上瀧 奈央



第21回平和絵画コンクール
佳作 湖畔小学校5年 阿部 晃大



第21回平和絵画コンクール
佳作 湖畔小学校5年 門間 大



第21回平和絵画コンクール
佳作 共栄小学校4年 北田 ^{きただ} 澄^{すみ} 伶^れ



第21回平和絵画コンクール
佳作 釧路小学校3年 三宅 ^{みやけ} 菜^な 月^{つき}



第21回平和絵画コンクール
佳作 共栄小学校2年 なかじま 中嶋 優月



第21回平和絵画コンクール
佳作 愛国小学校1年 いわやま 岩山 勇翔

第34回平和図書読書感想文コンクール

最優秀賞（釧路市平和都市推進委員会委員長賞）

「戦禍の真実体験談にあり」

北海道教育大学付属釧路義務教育学校 9年 樋渡 俊翔

「日本の勝利のためなら、自らの命を投げ出してでも戦う」と、戦地に赴くことを志願する若者がいた時代だった。悲しい別れのはずだが「バンザイ」と日本兵として国のために戦うことをたえられた。「生きることを放棄するのに、『何がバンザイ』だ」と思ったが、当時は、それが当然のごとく国民に浸透していたのではないかと私は考えている。それは、当時の大日本帝国憲法が根底にあり、天皇が絶対だったからだ。平成生まれの私に到底理解のできない話だ。

戦争体験が記されたこの本で、当時を幅広く知ることができたように感じている。被爆体験者は、一瞬で家族や友達、未来までをも奪われた。変わり果てた街並みや、真っ黒に焼け焦げた人や皮がずりむけた人々の様子。地面が遺体で散乱していたことなど、その恐怖から何度もフラッシュバックしたに違いない。それほどあの日の出来事は、衝撃的だったはずだからだ。今、こうして当時の惨状を、この体験談を読んでいる私たちに、克明に伝えようとする熱い思いが伝わってきた。言葉と写真から想像する戦禍の様子が生々しく感じられたのは、当時の様子が正確に伝わってきた証拠だろう。

以前、長崎や広島を訪れた姉からも、当時の惨劇についての語り部の話や現地で見たことを教えてもらったことがある。原爆資料館では、溶けた瓶同士がくっついていたり、焼け焦げた自転車が展示されていたこと。広島の平和慰霊式では、気温が38度もあるにも関わらず、たくさんの人が参列していたこと。中には、そのためだけに訪れた外国の人もたくさんいたという。それほど、世界中の人々の心の中に原爆を投下された日のことが刻まれていることを知った。真実を伝えることの重みが身に染みた。

当初、被爆者は日本人だけだと思っていた。しかし、日本軍の捕虜となったオランダ兵もいたことを知った。長崎で辛い労働を強いられ、日本語が話せないと暴力をうけるような差別もあった。その過酷さから仲間が次々と死んでいった。一方で、原爆投下によって、怪我をした日本兵を助けるなど、人類が平等であるという考え方を持った人がいることを目の当たりにした。つらい思いをしたのは、決して日本人だけではなくからだ。

長く続いた戦争の中から得たものは何もない。原爆投下によりさらなる悲しみのスパイラルが続く。放射能の影響でハイヒールがはけなかったり、死んで半焼けになった父親を置き去りにし、ずっと後悔の念にかられた人。被爆2世だからと、結婚をあきらめた人など。目に見えない敵との闘いと、体と心に負った後遺症は、とてつもなく大きい。

辛いのは戦時中だけではなく。戦後は、経済の再生にも時間を要するほど、日本列

島は疲弊していた。その中で、アメリカ兵が日本の子供たちに食べ物を与えていたという事実には驚いた。「捕虜になっても命が一番だ」という日本兵とは真逆の考え方を持ったアメリカ兵が見た日本人の粗末な姿から、敵も味方も関係ないと思える様子を感じとられた。

また、日本も少しずつ変化を遂げていた。最初に述べた憲法が、日本国憲法として生まれ変わり、王権が天皇から国民に。さらには、第9条の戦争放棄を条文に加えることにより、平和な未来を約束したのだ。当時を生きてきた人々は、どれほど安心したのだろうか。どれほどの明るい未来を思い描くことができたのだろうか。

戦争は、人々を不幸にする。狂わす。身近な人を失い、路頭に迷うことだってある。食料難で栄養失調になってしまうほどだ。そんな「戦争」というものが人間にとって必要なものなのだろうか。絶対に必要ではないと誰もが感じているはずだ。ただ、戦争を体験せず、戦争体験談にも耳を傾けずに生きて行けば、どうなってしまうのだろうか。戦争という人々を不幸にする行為について、安易に考えてしまうこともあるだろう。今回のように平和図書読書感想文コンクールが無ければ、「ナガサキノート」を手にし、読破することだってなかっただろう。世界唯一の長崎や広島の被爆地を訪れたことのない私にとって、当時を知ることができたことは大きな学びとなった。将来、被爆地を訪れ、当時について深く知り得たいと思っている。私が知らないだけで、まだまだ戦争には秘められた「事実」があるのではないかという気がするからだ。

第34回平和図書読書感想文コンクール

優秀賞（釧路市議会議長賞）

輝く明日

北海道教育大学付属釧路義務教育学校 9年 舟木 梨恵

「またね。」私たちにとって何の違和感もない、ごく普通のこの言葉。しかし約七五年前の日本では決してあたりまえではありませんでした。

私が読んだ「ガラスのうさぎ」は元々書店で見かける程度で、目にはしていても、手に取ることはありませんでした。それほど、私にとって戦争とは、とても遠い存在のものであったからです。しかし、今回のコンクールを機に母にすすめられて読んでみることにしました。母から聞いた話によると、母が中学生の時から課題図書に推せんされていたのだそう。長い間、人々に読み継がれるほど何か心に残るものがあるのだろうと感じて、興味本位で読んでみました。

この本の話は一九四五年三月十日に起きた東京大空襲をきっかけに、大切な家族を失った、この本の著者でもある当時十三歳の敏子さんが戦中の様々な苦難を乗り越えながら生きていくというお話です。敏子さんの「私は長女なのだから」「私一人しかいないのだからしっかりしなくては」と自分と同じ歳の少女が誰にも頼ろうとせず、懸命に生き抜こうとする姿に段々と心が引きこまれていきました。

私たちが普段生活する中で、家族か友人を亡くしたり、自分の命を強く意識したりすることはめったにないと思います。平和が当たり前のこの世の中で、戦争への意識がうすれていっている人たちがほとんどだと思います。しかし、約七五年前までは四六時中、戦争から自分の命を守ることを考えなければいけない時代だったのです。私は想像もつきませんでした。事実、敏子さんの生きていた時代では東京大空襲で東京の町はみるみるうちに戦火につつまれ、大勢の人が亡くなりました。なんとその数、約十万五四〇〇人になります。負傷者や罹災者もふくめると、約三二五万人に及びます。この数を目にしたとき私には到底信じられませんでした。こんなにも多くの命がなぜ犠牲にならなければならなかったのか、とても残念に思いました。それと同時に今私がこうして何不自由なく家族と一緒に暮らせること、生きていられることをとても幸せに感じられました。

また、敏子さんは東京大空襲で母と妹二人を失くして半年もしないうちに機銃掃射で父をも亡くしてしまいます。きっと敏子さんは不安と恐怖でいっぱいだったと思います。自分一人だけ取り残されて、どうやって生きていこうと先が見えない不安と自分もいつか父や母のように戦争で死んでしまうかという恐怖で生きていることすらままならない状態だったのだと思います。戦争の中で、他の人たちも敏子さんのように不安と恐怖の連続だったと思います。現在も世界で争いや戦いが行われているとニュースで見かけることがあり

ます。想像すると、とても恐しくなります。罪のない、全うに生きている人たちが国同士の争いによって、亡くなってしまうのはおかしいと思います。戦争の中で生きる人たちが明日も明後日もその次の日も生きていられるかは誰にも分かりません。しかし私たちには当たり前で明日がやって来ます。不安や恐怖を抱えずとも、明日がやってくるのです。

なぜ戦争が起きたのか。なぜ多くの命が犠牲にならなければいけなかったのか。その意味を考えるのは、この時代に生きる私たちだと思います。再び戦争を起こさないように、犠牲者を出さないように、そして誰も悲しまなくて済むようにこの時代に生きる私たちこそが考え、行動を起こすべきだと思うのです。

私は「ガラスのうさぎ」を読んで、戦争への意識が変わりました。読む前までは戦争は自分にはとても遠い存在のものだし、関係ないと考えていました。しかし、読んでみて戦争がいかに悲惨で、人を苦しめるものなのかが分かった気がします。戦争の犠牲者の死を無駄にせず、再び歴史をくり返さぬように今の私たちの生活を守り、新たな世代にも語り継いで行こうと思いました。

第34回平和図書読書感想文コンクール
優秀賞（釧路市教育委員会教育長賞）

本当の人間に

北海道教育大学附属釧路義務教育学校 9年 星 ころこ

「あなたは人間ですか？」

私はこの問いに対して、自信を持ってハイと言うことができる。私に限らず、今地球上にいる人類はほとんどそうではないだろうか。私はそれが当たり前のことだと思っている。だって私達は間違いなく人間だから。私は生まれてから一度もそこを疑問に思ったことはない。けれど、約七十六年前の広島と長崎には人間としての権利や希望を全て奪われた人達がいたという。

私が今回読んだのは、被爆者である作者の思いが詰まった詩集だ。私はこの詩集を読んで、今まで知らなかった原爆の闇を知り、その残酷さに恐怖を感じた。一つ一つの言葉から、作者の原爆への憎悪があふれ出して私の頭から離れなかった。その中で、特に私が忘れることができなかった一節がある。それは「炎の季節」という詩の中にあった。

列、
列、
不思議な虹をくぐって続く
幽霊の行列、
巣をこわされた蟻のように
市外へのがれる
道を埋め
両手をまえに垂れ
のろのろと
ひとしきり
ひとしきり
かつて人間だった
生きものの行列。

この文章の中では、被爆者の人々が色々なものに例えられている。

初めて出てきた、「幽霊の行列」というのは、被爆した人々の姿だけではなく、心情までも暗示しているものだと思う。

「どうして、私なの？」

「私達がそこまで悪いことをした？」

そんな理不尽な現実への怒りや悲しみを、非現実的な存在である「幽霊」として表しているのではないだろうか。

また、最後にある「かつては人間だった生きものの行列」という表現には、作者の思いが含まれているのだと思う。

その一番大きな思いとして私が考えたのは、「原爆は人間が人間であるために大切なものを奪う。だから、使ってはいけない。」

ということである。

あの日、原爆が空から降ってきた日、どれだけの命が奪われただろう。

その光に大切なものを奪われた人々が、どれだけ絶望しただろう。

この現実も受け入れるしかない人々は、どんなに悔しかっただろう。

けれど、この人達の思いを継ぐ人間は、今の世界にはとても少ない。世界唯一の被爆国である日本でも、戦争の記憶は消えかけてしまっている。

それでも私達は絶対に忘れてはいけない。あの日、大勢の人間が傷ついてしまった事実のことを。確実に未来へと伝え、人類の平和を築き上げなければならない。

そのために私達ができること。それは、平和を願い、戦争を認めない強い意志を持つこと。一人一人の強い意志が、世界を動かす時がきっと来る。

その時こそ、人間が本当の人間になれる時だと私はおもう。

第34回平和図書読書感想文コンクール

優秀賞（連合北海道釧路地区連合会会長賞）

普通があたりまえでない時代

北海道教育大学付属釧路義務教育学校 9年 高橋 仁子

私は、中学一年生の時に「夕風の街桜の国」という本を読みました。その本には「被爆後の広島」について3世代にわたってかかれています。その内容は一年たって中学二年生になった今でも、ニュースで戦争のことが取り上げられるたびに思い出します。私はなぜそんなに心に深く残っているのかを考えた時に、二つの特に衝撃をうけた部分に関係しているのではないか、ということに気がつきました。

1つ目は、主人公が被爆の十年後に被爆の影響で足がたたなくなり、血を吐き、目も見えなくなり最終的には亡くなってしまうシーンです。被爆後の10年間ふつうにすごしてきた主人公が、ある日とつぜん力が入らなくなってすい弱していく様子をよんでいて、私はショックをうけて、こわいなあと思うと同時に、くやしいなあとも感じていました。主人公は戦争の中でいただいた思いもせおしながらそれから10年優しく、強く生きてきたのに。本来死ぬはずではない、戦争がなければ死なずにすんだところで亡くなったことに、私はくやしさを感じていました。けれども私はこの本の中でのできごとがあまりしっくりきませんでした。現在ではこのようなことはありません。体験したことがないからこそ「こわい」と思っているだけで、そのもののおそろしさというのは、いまいち理解ができていませんでした。しかし、戦争の中で死なずにすんでも、その後

「もしかしたら今日死ぬかもしれない。もしかしたら明日？明後日？」と毎日おびえながらくらしていかなければならないのか、と想像してみると、戦争があたえた影響がとても大きいことがわかりました。

そして、二つ目は、死ぬ直前の主人公のモノログです。それは『十年経ったけど原爆を落とした人は私を見て「やった！またひとり殺せた」とちゃんと思うてくれとる？』

というものです。私はこれを見たとき、本心だったのか嫌味だったのかは今だに分かりませんが、その時ふとあたりまえのことですが「ああ、そうか。敵も人間なんだな。」

と、思いました。こちらには家族など、大切な人がいて、任務があります。でもそれは、戦っている向こうも同じだということに気がつきました。それでもこわいのは、どちらも間接的であったとしても、相手に、「不幸を願った」ということです。この心に深く残っているモノログは、気がつくとも永遠に考えてしまいます。それくらい衝撃的でした。

最後に、何度この本を読み返しても必ず思うことの一つは「今の生活があたりまえでない時代があったのだな。」

ということです。それを知った上で、日々を大切に生きてみようと思いました。また、疑問に思ったことや、考えたことを、メモしておきたいと思いました。成長していく中での考え方の変化も大切にしていきたいと思います。

第34回平和図書読書感想文コンクール

佳作

私達が伝えるべきこと

北海道教育大学附属釧路義務教育学校 9年 成田 くれあ

私は、今まで「戦争」や「兵器」といった言葉について恐ろしいなとかどうしてこんな兵器をつくってしまうのかな、と疑問に思ったことは多くありますが、「どうすれば止められるのか」と深く考えたことはありませんでした。でもこの本を読んでみて、自分も世界問題の解決に貢献できるかも知れないと思えるきっかけになりました。

私が読んだ本は「I CAN」、正式名称は「核兵器廃絶国際キャンペーン」という組織の人が書いたもので、このI CANは国連で定められた核兵器禁止条約をつくる際に大きく貢献し、二〇一七年にノーベル平和賞を受賞しています。

ですが、I CANは大きな組織ではないと筆者は言いました。「核兵器なんて無くせる訳がない」と否定的な意見を言う人も多くいたそうです。

でも、I CANの人達はそんな外部からの声を気にせず、核兵器問題に正面から真剣に向き合って、核兵器禁止条約の成立に至ったといっています。

通常、ノーベル平和賞は平和の推進に力を尽くした政治家や活動家、学者などといった有名な人達が受賞してきました。でも今回は「核兵器を廃絶したい」という気持ちを持った人達に向けて与えられた賞、「世界を変えたのは僕達のような普通の人だ」と筆者はいいました。

筆者自身も、冷戦の時期に広島での平和式典に行ったことがあるらしく、核兵器で本当に世界が破滅してしまうのではないかと考えたそうです。

また、筆者は戦後間もない頃のイランにも足を運んだそうです。その時に現地の人の家に泊めさせてもらったのですが、その人の家族も戦争により命を落としていたそうです。旅の中でも、街のいたるところに戦争の傷跡が残っていて、建物に大きな穴が開いていた、くずれてがれきだらけの風景が生々しく戦争の様子を物語っていたそうです。こういった経験が、後にI CANへ入るきっかけの一部になったそうです。

私は小学生の頃に原爆の被害にあった人の家族の方から、原爆について話を聞く機会がありました。そして原爆投下直後の街の状況や核兵器の恐ろしさについて知りました。話を聞いた後、もし自分がその場にいたら、と思うととても恐ろしくて考えられませんでした。同時に、核兵器について知らない人達やこれから生まれてくる世代へ、戦争や核の恐ろしさや平和の大切さを伝えていかなければならないと強く思いました。今現在、核を保有している国は多くあります。その国の人に今一度核の恐ろしさや平和であることの重要性を知ってもらいたい、世界から核を無くしてほしい。そのために自分は何ができるのか

をよく考えて、人に伝える機会があれば自分が知っていることを全て話し、そして後世の人に絶えないよう伝えていってほしいと強く思います。

第34回平和図書読書感想文コンクール

佳作

後世に伝えていくべきリアルな事実

北海道教育大学附属釧路義務教育学校 9年 菅野 綺子

私はこの本を読んで驚いたことがいくつもあった。私は戦争に関する本やテレビ番組、映画などにはほとんど触れたことが無かった。なぜなら戦争は「恐ろしい」というイメージがあったし、戦闘機などについても正直言って興味が無かった。それで小学六年の社会の授業で学んだことだけで戦争のことをほとんど知ったつもりになっていたのだ。だから本の内容には私にとって驚きだったことや意外だったことがいくつもあった。そもそも私が読んだ「永遠の0」という本は、今まで「おじいちゃん」として接していた人が血のつながっていない人物だと知った二人の孫が戦死した本当の祖父が一体どんな人物だったのか、当時の戦友たちから話を聞いて明らかにしていくという物語になっている。私は、その戦友たちが語った当時のリアルな様子の話で私にとって意外で衝撃を受けたこと、つまり「恐ろしさ」を感じたシーンは特に二つあった。

まず一つ目は、ある飛行機が故障し、海に不時着した出来事だ。その飛行機はまもなく海に沈んでいったが、その飛行機を操縦していた、小山という男はライフジャケットを着て海に脱出することができた。そして近くを飛んでいた井崎という男は、持っていた食糧をマフラーに包んで、海に浮かんでいる小山に落とした。その後、井崎は飛行場に戻って小山の着水場所を知らせるとすぐに水上機が救助に向かったのだが、小山の着水場所にはすでに彼の姿はなく、数匹の鰻（ふか）が泳いでいたという話だ。私ははじめ、「鰻」というものが何なのかよく分からなかったのだが、サメのことだということが調べて分かった。これは恐ろしくて特に印象に残った。小山は飛行機が故障して海に落ちてしまったというのに命は無事だったので、私はそこでほっとした。しかし、海のサメに食べられて死んでしまうとは、なんて運が悪かったのだろう。今まで私は戦争中に軍人が亡くなった原因は、敵にうたれた、または飢餓というイメージしか無かったのでこれには衝撃を受けた。小山を救おうとした井崎はどんなに悔しかっただろう。もし私が井崎の立場だったら、と想像するだけでも恐ろしいが、実際に経験した人間にしかわからない辛さがあったのだと思う。

二つ目はある日の食事の時間の出来事だ。朝食の席で東野という男が「一度でいいから美味しい大福を食べたい!」「命を懸けて戦っているんだ。大福くらい喰わせて貰ってもいいだろう」という冗談を大きな声で言うとそこにいた人たちが笑った。戦争中のパイロットたちは大福餅など食べる機会がほとんど無かったそう。すると、その日の夕食の食卓に、大福餅が並んでいた。これは東野の声を聞いた炊事員たちが一生懸命用意してくれたのだが、その夕食の席に東野の姿は無かった。彼は戦いに出て、無事に帰ってくることが

できなかったということだ。戦争中、大勢の人が亡くなっているのは私はよく知っていることだが、朝食の時にいつも通り笑って過ごしていた仲間が夕食の時にはもうこの世にいないというのは本当に悲しいことだ。でもこれが当時の人々にとっては当たり前のことだったのだ。国のため、家族のために戦った軍人たちだけではない。彼らが勇敢に戦い、生きて帰ってくことを待ち望んだ家族など当時の日本の国民も本当に今のわたしたちにはわからない辛さがあつたのだろう。毎日次々に人が亡くなっていくのだ。そして広島・長崎におとされた原子爆弾によって一度に、それまで以上の大きな規模で建物は破壊され、人々が死んだいった。当時は広島・長崎の原子爆弾の話聞き、日本という国が本当に滅んでしまうかもしれない、という絶望感を持った人がたくさんいたそう。今、自分たちが家族・友達と毎日笑顔で当たり前に生きていることがどれほどありがたいことか、身に染みてわかった。終戦から約七十五年の現在まで、日本の社会を切り開いて努力してきてくださった方たちに改めて、感謝の気持ちでいっぱいになった。

平和図書読書を通じて、私自身、社会の授業だけでは知ることができなかった当時のリアルな様子・考え方などを先ほどの二つ以外にもたくさん発見し、衝撃を受けた。二〇二一年で終戦から七十六年も経ち、当時をよく知る方々は高齢になり、私たちがお話を聞ける機会が少なくなっている。その中で、平和図書読書を通じて以前の私のように戦争をあまり知らない人たちにもっと伝えていくべきだと思った。

第3 4回平和図書読書感想文コンクール

佳作

「原爆と日常」

北海道教育大学附属釧路義務教育学校 9年 村田 拓海

「焼け野原」。この言葉をきいたとき皆さんは何を頭の中で想像するだろうか。おそらく、多くの人が同じものを頭に浮かべるだろう。辺り一面が火の海、こんな様子がもし現実でおこっていたらと思うとゾットする。私が今このようなことを考えるきっかけを作ってくれたのは、ある一冊の本だった。その本は、井伏鱒二さん著の「黒い雨」である。

本作の主人公である閑間重松は、同居している姪の矢須子のことでも悩まされていた。婚期を迎えた矢須子であったが、縁談が持ち上がるたびに「広島市内で勤務中、被爆した」とうわさが流れ、破断がくり返されていた。あるとき、彼女に再び縁談が持ち上がる。この好機をなんとか成功させたい重松は、矢須子が原爆が落とされたとき広島とは別の場所にいたことを証明するため、当時の彼女の日記を清書しようとする。しかし実際は、彼女も原爆投下後に降る黒い雨を浴びていた。この事実を書くべきか悩んでいるとき、矢須子が原爆症を発病してしまう。病状はどんどん悪化していき、結局縁談も破断になってしまうのであった。

この本は、見たらわかるように原爆で被爆した「被爆者」がモデルとなっている。それに、これは実話をもとにかかれている。この本の著者である井伏鱒二さんが直接経験したわけではないが、被爆した当時の方々から聞いたものらしい。そのため、一つ一つの描写が細かくかかれている。中には、あまりにも残酷すぎて思わず目を背けたくなる場面もたくさんある。それほどのが今から75年前に実際に起こっていたのだ。この本を初めて開いたときの私と、全て読み終えて本を閉じたときの私とでは、戦争に対する思いがおそらくだいぶ違っているだろう。戦争はとても恐ろしい。なぜ戦争をするのだろうか。頭の中でたくさんの感情が浮かんできた。戦争は多くの人の命をうばっていく、とても残酷なものだと強く思うようになった。

いったい当時の方々はどうのような気持ちであの地獄をみていたのだろうか。「助けてくれえ、助けてくれえ」と泣き叫ぶ声、「水をくれ、水をくれ」とあちこちからきこえてくるというような描写がこの本にはたくさんあった。これが現実で起こっていたことを想像してほしい。今の日本ではありえないことだと思わないだろうか。もしも今、このようなことが起こっていたとしたなら。私は現実から目をそむけているだろう。しかし、当時の人々はそんなことはせず、ただひたすらに生きようと必死だったのではないだろうか。私はそんな方々を尊敬している。

始めにもいったように、辺り一面が火の海とはとても怖い。なんのために戦争をするの

か。ただ多くの人が苦しめられ亡くなっていく。たとえ生きていたとしても、なにかしらの後遺症がのこる。今回の物語が良い例だ。だれも得をしないし、だれも喜ばない。その人はとても悔しいはずだ。全てこの「戦争」で何もかもをうばわれてしまう。そんな悲しい出来事が昔、この日本で本当に起きていたのだ。戦争とは何か。私は嫌になるほどこの本から教わった。

今の私達の生活は平和であるだろうか。おそらく、これまでの話と比べて平和ではないと感じた人はいないだろう。なぜ私達が今、こんな当たり前な日常を過ごせているのか。それは、この事実を原爆の被爆者に問わず国民全員が後世に伝えているからだ。しかし、被爆者の方々もいずれはいなくなってしまうのは仕方のないことである。そのために後世につなぐのだ。次は私達の番。私達が後世につなぐ。当時の方々が願っていた、この平和な日常がいつまでも続いていくように。

第3 4回平和図書読書感想文コンクール

佳作

十四歳の命

北海道教育大学付属釧路義務教育学校 9年 岡林 紀花

原爆の話になると、私はいつも同じことを思い出します。小学三年生のころに読んだ、一冊の本。たった十四歳の女学生の被爆を描いた、物語です。

主人公の若子は、十四歳の女学生です。彼女の友人が、洋子です。二人は幼なじみで、同じ村に住む同い年です。二人は大の仲良しでした。

戦争が始まってから、女学生達は工場で働かされるようになりました。若子と洋子は、同じ兵器工場で働いていました。ところが、仕事がないので、二人は立ちばなしをしていました。若子は柱のかげに、洋子は窓ぎわに立っていました。

そのとき、原爆は投下されました。するどい光を放って、熱風とともに落ちてゆきました。悲鳴をあげながら顔をゆがませた、洋子の背中にガラス片が音をたてて刺さっていくのを、若子は見っていました。

私ははじめ、驚いたろう、苦しかったろうと、勝手に想像していました。でも少し違いました。彼女たちは、逃げることに必死でした。ただひたすらガレキをかきわけ、すきまから誰かの足を引っばって、「助けて」と呼んだところで、誰も助けてくれないのです。

やっとガレキからはいだした若子は、炎の中を、同じ女学生らしい女子の背中を追ってひたすら逃げました。死体の積もる中を、避難所まで走りました。

避難所で若子は洋子に会いました。洋子はブラウスが焼け、ガラス片が背中に刺さっていました。それを見た若子は気まづくなりました。柱のかげにいた若子は、けがをしなかったのです。

若子は作中で、「死ぬか生きるかの中でやっと拾った命。人にかまう余裕などなかった。」と思いながらも、「逃げるとき、私は洋子を助けなかった。」と思い、「二人一緒に逃げよう。」と言うのをためらっていました。彼女はただ、ひたすら葛藤していました。生きることに必死であったにもかかわらず、自分が友人を助けなかったことが胸の中につかえているのではと、私は思いました。

先生との約束を守り、二人は翌朝山に登りました。途中で二人はくぼ地に座り、若子はふと洋子の背中を見ました。ガラス片を一つでもぬけば、少しでも痛みが減るのではないか。痛いとうったえる友人を想って、すばやくガラスをぬきました。そのとき、若子は見てしまいました。背中 of 傷口から、うじ虫が出入りして、肉を食べていました。洋子は、はじめ「何でうちにうじ虫がたかるのよ」と言っていました。ところが、怖くなった若子がうじ虫を殺すと、「殺してはだめよ、それはうちよ」と言って笑うのです。

若子は、自分もうじ虫に食われてしまうことをおそれていました。「それだけは、仲良しの特権だから、とって許したりはしない。一つのこらず殺して、洋子に勝ってみせる。」若子はそう思い、山をかけおりました。「一人にしないで」という洋子の声を聞かないよう、耳をふさいで若子は逃げました。

若子は現実を受け入れたくなかったのだと思います。友人がうじ虫に食われている姿を見て、とても怖くて気がまいてしまったのではと思います。そして翌日、若子は洋子が死んでいるのを見て、「あたしには関係ない」と言ったときも、そうだったと思います。

放射線の影響で、若子は毛穴がくさって亡くなりました。ハエが周りを飛んでいました。

原爆が投下されてから、村にかえるまでの三日間のことを、若子は誰にも話せずにいました。若子はこれを話したら、「非情か!」と非難されると思い、村人たちは何もわからないからと、何も話しませんでした。

段々と、若子は何も信じられなくなっていったのではと私は思います。己の命を守ることすら厳しい状況で、友人を見捨てなければならなかった若子は、葛藤の中でも、ずっと自分を責めていました。

若子は、洋子の母、好に、若子が洋子を置きざりにしたのでは、とさとられてしまいます。でも、若子の母、つねは思いました。

「好が若子をうらむのは間違っている。うらむなら、あのばかでっかい火の玉をうらむがいい。生き残れなかった、我が子の不運をうらむがいい。」

若子は、うじ虫に食われて死んでいきました。毛穴がくさって死んでいきました。洋子のことを「仕方がなかった」と思いながらも、後悔しながら、責めながら死んでいきました。

友人を助けることもできず、自分が助かることもできずにこの世を去った女学生。あの日、あの時、あの場所に降った、でっかい火の玉は、何をもたらしたのでしょうか。死と、苦しみと、悲しみと、葛藤…。その光は、ただただ人間を奪っていくだけのものでした。

亡くなった人も、奪われた幸せも、もう取り戻すことはできません。だから私は叫ぶのです。二度と同じ悲劇をくり返さないために。

第34回平和図書読書感想文コンクール

佳作

幸せの崩壊

釧路市立音別中学校 2年 吹矢 煌晟

皆さんは原爆を受けたことがありますか？少なくとも現代に生まれた人はいないでしょう。今回は、その原爆について知るために『ぼくは満員電車で原爆を浴びた』を読みました。

この本は、戦争の世の中を必死で生き抜いた、小出裕章さんの物語です。小出さんは、十一歳の時に原爆を体験しました。このころは戦争のまっただ中、食事や衣類も一人分の量が制限されていました。小出さんは空襲から避難するため、妹、学校のみんなと先生と学童疎開をしました。寂しくてめそめそしていると、先生に殴られたりしたそうです。何日かたって、家族と再会することができたと書かれていました。

八月六日月曜日、小出さんは、家族で広島市内に行くために、満員電車に乗りました。何分かたってから電車が大きく揺れ、遠くで何かがぴかっと光り、一瞬にして窓ガラスが割れ、窓側の人たちは血まみれになりました。原子爆弾が投下されたのです。

原子爆弾の威力がどれだけのものか、僕には想像できません。しかし、本の内容を知れば知るほど、原子爆弾の威力は凄まじく、恐ろしいものなのだと感じました。

小出さんたちは内側にいたため無事でした。それから北へと歩き出しました。必死の思いでたどりついたのが練兵場でした。そこに着くまで、数え切れないほどの死体を見てきたと書かれています。

しばらく兵隊について行くと広い空き地にでました。そこへたくさんの被爆者が避難してきました。それからすぐ、吐き気が襲い、全部吐いてしまったそうです。すると、のどが渇いて水がほしくなり、河原へ行きました。しかし、飲んだ人が次々と倒れていく、というのです。すると、周りから「飲んだらあかん」、「敵が川に毒を流しとるんだ」、そんな声が聞こえ、小出さんらは、飲むことができなかったそうです。しばらくぼんやりしていると、兵隊が通りかかり、小出さんたちはトラックに乗せられました。小出さんたちが荷台で目にした光景は、

折れた骨が皮膚も突き破って、外に飛び出している人。血がこびりついているひと。

肉が割れて、脂肪のようなものが飛び出している人。

この文章を読んだとき、衝撃を受けました。

他にも。

その人には目がなかった。目のところが大きな暗い穴になっていたのだ。目がなくなってしまうと、顔にはこんな大きな空洞ができるものなのか、と僕は思った。でも、僕はすぐにその人から目をそらしてしまった。飛び出した目玉が、ほおのところにぶ

ら下がっていたからだ。

このような状態になってしまうのかと思うと、「原爆がこんなに恐ろしいなんて知らなかった」と、あらためて思い知らされました。こんな恐ろしい体験をした小出さんにも、長期間の貧しい生活のなかで、悲劇が起っていました。

八月十六日か十七日だったそう、「髪が抜けた」…。小出さんは絶望的になったそうです。頭に負っていたケガが悪化して頭部が変形し、高熱が出て死にそうになったそうです。そんなとき、小出さんの母がなくなりました。でも、小出さんに奇跡が起こりました。熱も下がり、嘔吐も止まり、ご飯も食べられるようになりました。それから、妹も放射能を浴びた母の乳を飲んでいて影響で、死んでしまったそうです。また、髪が抜けてしまった小出さんは、学校でいじめられたりして、髪がまた生えてくるまでは、つらい日々を送ったそうです。

この「ぼくは満員電車で原爆を浴びた」を読んでみて、僕は、原爆が、数え切れないほどの人々の命を奪った、幸せを壊した、実際にたくさんの人々を傷つけたのだからもう戦争なんかしてはいけないと改めて強く感じました。小出さんがどんなに悲しく、どんなにつらい思いをしたかは僕にはわかりませんが、小出さんのような思いをする人が一人でも出ないように、もう二度と戦争はしてはいけないと思います。

この機会を通して、幸せは薄い壁で守られていただけなのだ、すぐ壊れるのだと、わかりました。また、小出さんのような体験をし、髪が抜けたり、大切な人を失ったりした人への差別やいじめがなくなれば良いなと思いました。この作文で、世の中の考え方が少しでも変わることを願って、この思いを未来に伝承していきたいです。

第3 4回平和図書読書感想文コンクール

佳作

この世界の片隅にを読んで

釧路市立景雲中学校 2年 札 遥奈

私はこの作品を読んで「どんなにつらいことがあっても立ち直り、真っ直ぐ生きていきたい。」と思いました。そう思ったのは主人公すずがそう生きているからです。

すずは大切な人を失ったり、傷ついたりしても前向きに歩いていき、それを北条家のみんなや家族は温かく見守り、支えていました。そのお互いの絆に感動しました。右手の先で大切な人を失ったり、戦争の終わりが近づきラジオで「負けた」と聞き、国の正体を知り、「暴力で従えとったという事かね、じゃけえ暴力に屈する言う事かね、それがこの国の正体かね、うちも知らんままに死にたかったなあ」と一人つぶやき涙を流しても、それでも前を向いて歩いていこうとする姿にはやはり感動させられました。

後悔して立ち直って、傷ついて、後悔して、やはりまた立ち直ってすずは幼かった頃から立派な人へと成長していきました。私は中学校に入学して最初のテストで思ったより点数が悪くて傷ついて、でも本当はもう少し勉強できたんじゃないかって後悔して、立ち直って勉強すれば良かったのに「もうダメだ。」って下がっていく一方。そうやって私は傷ついて後悔して立ち直ったように見えて立ち直れていないことがあるので成長できていないのだと思います。

すずは優しく素直で、自分の意思がしっかりあって、でもちょっと抜けていて、だからみんな力になりたいと思うのだと思います。実際私の友達にもすずのような性格の子がいます。私はその子が大好きで、困っていたら何とかしてあげたい。と思います。すずの周りにいる人もきっとそう思っていると思います。だから私も真っ直ぐな性格になりたいと思いました。

私が「この世界の片隅に」を読んで一番印象に残っている言葉は「この国から正義が飛び去っていく」です。これは、すずが国の正体に気付いたときに思ったことです。国民は「国がやっていることは正しい」と思っていたのに、訳も分からず戦争に巻き込まれ、それでも国を信じた結果訳も分からず戦争は終わったのです。ただ国を信じて言うことを聞いただけなのに戦争に駆り出されて戦死し、大切な人をうばっていったのです。そんな国を、六年を国民は信じつづけていたのです。

私は戦争について、原子爆弾についてよく知りません。もちろん経験したこともありません。ただ「無差別に人の命を奪うもの」ということは知っています。大切な人を失う気持ちはよく知りません。ただ「とてもつらく、苦しい」ということは知っています。それでも前を向かなきゃいけない人達の気持ちをよく知りません。子を親を、兄弟・姉妹を恋

人を失うことはとてもつらいはずです。その気持ちを経験しなければならなくなってしまった人達。次の瞬間大切な人を失うかもしれない日々、そんな中生き抜いた人達は本当にすごいと思います。「この世界の片隅に」は大切な人を失ってしまった人達の心情がしっかり書き表されています。今は戦争のない平和な時代ですが、いつ大切な人を失うかわからないのは今も同じです。でも戦争や核兵器によって苦しむ人は八十六年前に比べれば減りました。それでもつらい思いをしている人はいるのです。もう二度とこのようなことがないことを願います。

「この世界の片隅に」という作品に出会い戦争について改めて考えられて良かったです。

第20回平和の主張コンクール

最優秀賞（釧路市平和都市推進委員会委員長賞）

戦争について考え、理解する

北海道釧路江南高等学校 1年 藤澤 輝煌

「平和」と聞くと真っ先に戦争が思い浮ぶ。平和の意味を調べると「戦争や暴力で社会が乱れてない状態」と書かれていた。では、今日の日本はどうだろう。世界的に見ても平和な国と言えるが世界には今もなお、紛争や内戦が続いている国はある。日本も近隣の国との領土問題が時々取り上げられることもあるが幸い深刻になってはいない。だがそれでよいのか。自国だけでなく世界全体としての平和を求めていかなければならない。そして、一人一人が考えていかななくてはならない。

なぜ、戦争は起きるのか。領土や資源の争い。互いに異なる民族、宗教を信じる者同士のぶつかり合い。つまり、利害の不一致や意見の相違から生じる。どちらかが攻めてきたら応戦せざるを得ない。やはり戦争は止められないものなのか。だが、決して戦争を肯定してよい理由はない。なぜなら、人が死ぬからだ。

僕達高校生が戦争について考える時間は、はっきり言って少ない。終戦の日である八月十五日。社会の歴史の時間などが挙げられる。多いと言えるだろうか。戦争を経験した方が周りにいれば話を聞く機会があるがなかなかない。これでは世代を重ねるごとに、戦争に対しての意識や恐怖心が風化していつてしまう。なので、学校で積極的に戦争について考える機会を作っていつてもらいたい。

かく言う僕も本格的に戦争について考え始めたのは、中学校2年生の時である。社会の時間に教材のDVDで戦争時の生活や戦いを見た。その時に衝撃を受けて家でも戦争関連の番組を予約して見るようになった。僕は戦争の知識や見聞が少ないが今まで見てきた映像の中でも特に二つ心に深く刺さったシーンを紹介したい。一つ目は、日本の植民地となった東南アジアで行われた日本語弁論大会という日本語でスピーチする大会で、ある少年が強く印象に残った。彼は、小学生ぐらいの歳で信じられないほど流暢な日本語を見せた。直接的に戦争の恐ろしさが伝わるシーンではないが、よく考えてほしい。年端もいかない子どもが他国の言語を強いられているのだ。そこで彼が語っていたのは、日本への愛だ。自分が生まれた国への愛ではない。言語だけでなく文化や思想も染めてしまう。二つ目は、サイパン島での日本軍とアメリカ軍の戦いで、ある女性が映されたシーンだった。地上戦で民間人も巻き込まれて島の北端に追いつめられたのだ。その女性は崖から飛び降りて自殺した。もちろん、鮮明には映されなかったが一瞬、頭が真っ白になった。その崖では約一万の人が自殺したらしい。ただただ恐怖を覚えた。自殺するのは尋常ではない精神力を要する。しかし、その女性からは何の迷いもないように見えた。戦争はそこまで人を追い

つめるのか。戦争は理性を失わせる。ショッキングなシーンだが、戦争の恐怖をわからせるには充分だった。「戦争は絶対にダメ」。頭で理解してるつもりでいたがこの映像を見てやっと確信に至ることができた。他にもたくさん紹介したいシーンは、あったが今回は少し変わった視点の戦争の恐怖を伝えたかった。

最後に僕が言いたいのは、二つ。「戦争をしてはいけないとわかっているつもりになっていないか？」そして、「僕達、高校生に何ができるのか？」について。「戦争をしてはいけないのは常識」。戦争を経験した国の中でも唯一の被爆国である日本国民は全員、そう教育されてきたと言っても過言ではない。常識であるからこそ深く考えようとしない。それでは本当の意味での理解はできていない。断言はできないがそういった人は、大勢いると思う。自分の立場になって考えてほしい。今日のようにお腹いっぱいご飯が食べられるのか。今、住んでいる家が明日もあるのか。隣にいた友達や家族が明日も隣にいるのか。戦争は日常を一瞬で壊してしまう。そんな戦争を起こさないために高校生ができることは何か。はっきり言って直接的に戦争を止めるためにできることは少ないと思う。それでは、一人一人ができて、かつ簡単にできることは何か。それは、「知る事と広める事」だと僕は思う。一人一人が戦争に対しての理解を深め、そこで知った事を周りに伝えていけば少しずつ人々の意識を変えることができると思う。知る方法はたくさんある。インターネットが普及している現代では誰でも情報を手に入れられる。それでもめんどろという人は、教科書をただめくって見るだけでもいいし、テレビで戦争について流れていたら少し耳を傾けるのもよい。そこで得た情報や意見を周りの人と共有する。そんな過程の中で戦争の恐怖を真の理解ができる人が増えてゆくことを願う。

第20回平和の主張コンクール

優秀賞（釧路市議会議長賞）

想像と明日

北海道釧路江南高等学校 3年 寺後 彩葉

私はよく明日を想像する。明日がどんな日になるかどんな日にしたいとか考えながら、ただ淡々と過ぎる今日と明日という無条件な当たり前を信じて生きている。そして明日という始まりに期待する。しかし、明日に終わりを期待している人もいるだろうー

あなたは、日本の終戦について、何か勘違いしていないだろうか。日本の終戦は1945年8月14日のポツダム宣言受諾あるいはその翌日の玉音放送つまり、天皇が国民に日本国の敗戦を伝えた日だと思ってはいないだろうか。確かに、教科書にはこう記されている。だが、日本全土の全面降伏を認めたのは、同年9月7日。この1か月のタイムラグは、あまり知られていないのかもしれない。

沖縄戦。日本で唯一地上戦が行われ、およそ18万人もの犠牲者を出した戦争である。これだけではない。沖縄戦の終戦は1945年6月23日とされている。現在沖縄県ではこの日を慰霊の日とし、戦没者を追悼する日と定めている。1945年のこの日、日本軍のトップであった牛島満司令官が自害した。このことが終戦の合図だとされている。しかし、彼は部下たちに『生きて虜囚の辱めを受くることなく、悠久の大義に生くべし』、つまり、『生きて米軍の捕虜にはならず、国のために戦い続けろ』と遺言を残した、と言われていた。この言葉が後の兵士や沖縄県民を縛り付けることとなった。

そして、この自決は終戦の合図としては小さすぎたというのが現実である。終戦を知らず戦い続けるもの、身を隠すもの、また終戦を知りながら、牛島の言葉どおりに戦い続ける者もいた。最も信じ難い事実、それは集団自決である。家族や仲間同士で胸に手榴弾をあて、自決する。これだけ悲惨なことはあるだろうか。結局この戦争は6月23日以降にも日本の全面降伏まで多数の被害者を出すこととなった。

こんなにも沖縄戦に関心を寄せたのは沖縄への修学旅行がきっかけである。ひめゆりの塔やひめゆり平和記念資料館、平和記念公園に実際に足を運ぶことができた。ひめゆりとは、ひめゆり学徒隊が由来している。当時の中高生が看護訓練を受け、結成された女子学徒隊である。戦争で怪我を負った人の治療が主な仕事だ。小さな壕の中、たくさんのうめき声の中、彼女たちは必死に治療をしていたそうだ。学徒隊一人一人の顔写真は、とても若く未来ある学生にしか見えなかった。しかし、彼女たちは明日に終わりを求めているだろう。彼女たちが与えられていた環境がどれだけ劣悪で悲惨なものか、私は想像することしかできなかった。同時に今、生きているこの環境に感謝せざるを得なかった。また、記念資料館にはたくさんの千羽鶴が寄せられていた。『私たちは、平和に生きています。』と

文章を添えて。

平和記念公園には平和の礎（へいわのいしじ）がある。これは、国籍・出身地・敵味方関係なしに沖縄戦で亡くなった約24万人分の名前が記されている。それを見たとき、私は一瞬アートのように見えてしまった。24万の命の重さを理解できても、どこか現実とはかけ離れた世界を想像してしまう。

また、礎には、釧路出身の戦死者の名前も記されていた。こんな離れた地に釧路の名前があること、釧路出身の方も多く亡くなっていたことに驚きを隠せなかった。献花をするとき、その花束がずっと重さを増し、何か言葉に表せないものに吸い込まれそうになった。そして、私は悟った。私たちは、戦争に対して想像の世界でしか生きることができない。幸せなことだ。しかし、この戦争というものを理解しなければならない。理解しないということは平和への依存だ、と。

私たちは、戦争を経験していない。だから、戦場の凄惨な状況を知らないのであって、ただ戦争を知らないというのは紛れもなく嘘だと思う。知っていなければいけない私たち人類が過去に生み出した負の遺産なのである。

私は、よく幸せなあしたを想像する。何気ない今日と気まぐれなあしたかもしれない。それでも、この嘘のようで本当の出来事を胸に、誰も知らない真っ白なあしたに期待して、私は生きていく。

第20回平和の主張コンクール
優秀賞（釧路市教育委員会教育長賞）

私たちができること

北海道釧路江南高等学校 2年 小関 廉

平和の反対は何かと聞かれると、やはり思い浮かべるのは「戦争」だった。戦争の恐ろしさは日本国民ならば誰もが知っているのものであろう、世界で唯一の被爆国であるからだ。度々テレビや新聞で取り上げられる核兵器、どれだけの威力があり、どれだけの被害を被ってきたか、我々はよく知っているが世界はどうだろうか。世界で唯一の被爆国として、日本は世界に対して核兵器の恐ろしさについてもっと広める必要があると思う。

核兵器禁止条約について調べた時、私は当然日本は批准していると思っていた。その考えは裏切られ、現在核兵器禁止条約に署名しているのはどれも核兵器を身近に感じていない国ばかりであった。アメリカ、イギリス、フランス、中国、ロシアの核保有五大国や日本は不参加という結果だった。日本はアメリカに軍事的に助けてもらう立場である以上、不参加という決断に至ったとされている。

とても現実的な話だと思うが、それが正しいかと言われると、首を縦には振れない。世界は核兵器の恐ろしさを十分に理解してないのではと思う。被爆国である日本でさえ、国民に十分に浸透はしていないのだから、日本はまず国内で核に関する教育をより深く行っていく必要があると思う。その延長で世界にも核兵器の恐ろしさ、残酷さを伝えることができれば、核保有国を始めとする諸外国も核兵器に対する否定的な意見も増えるのではないか、と思う。

具体的にどのようにして世界に核兵器について知ってもらうかという点、やはり「SNS」の存在が鍵となってきたと思う。SNSならば誰もが簡単に情報を発信できる特性があるからだ。実際にアメリカの若者は、動画投稿サイトなどのインターネット上で知見を得た、とアンケートで答えた人が多く存在した。このことからSNSで我々が情報を発信することに意義があると思う。

「原爆を投下したことは間違いだった」そう世界中の人々が思うまでにどれだけの時間がかかるだろうか。いや、そんなことは不可能かもしれない。戦争はどちらの国も被害者面をするからだ。私達日本人は原爆を、「落とされた」側の人間であるが故に、「落とした」側の人間を絶対的な悪として捉えてしまう。だがこれは間違いだ。彼らも彼らなりの正義があったに違いない。私が言いたいのは原爆投下は間違いだと思うが、戦争でどちらの国が悪だったかを議題としてはいけない、ということだ。そこに固執してしまうと議論は一向に進まないからだ。ただ私達がすることは、戦火に見舞われた方々の体験、想いを世界に発信していくことだ。核戦争を望む人間なんて一人もいない。最終手段として核兵器を選択肢に入れるようなことはあってはいけないと思う。

当たり前で毎日を生活していることに感謝しなくてはならない。今この時もどこかで戦争

している国がある。このことを忘れてはならないと思う。いつの日か日本の平和の主張によって、戦争に怯えることのない世界が訪れることになれば良いなと、心から思う。

第20回平和の主張コンクール

優秀賞（釧路市連合町内会会長賞）

「平和」について思うこと

北海道釧路北陽高等学校 2年 畑 理子

国際社会において「平和」は戦争が発生していない状態を意味します。元来、戦争は宣戦布告に始まり平和講和条約をもって終了し、これにより平和が到来するとされてきました。国際連合憲章の意では、一般に、自衛権や安全保障理事会の決定に基づくもの以外の武力行使は禁止されており、伝統的な意味での戦争は認められなくなっています。

しかし、武力戦争が各国で発生しているのが現状です。特に第二次世界大戦後の武力衝突では宣戦布告もなく休戦協定も頻繁に破られるなど旧来の戦争の定義と平和の時期的な区別も曖昧になっているという指摘がありました。

また、従来、国際平和秩序はあくまでも国家間での平和の維持を共通目標とするものにとどまる事、各国の国内の人民の安全まで保障しようとするものではなかった事から、各国の国内での人道的危機が国際社会から見放されてきたのではないかという問題も指摘されています。これらの観点により「国家間の平和」から「人間の安全保障と平和の両立」の発展が社会の新たな課題となっています。

そして、二十世紀にした政府権力による民衆殺戮の犠牲者数は戦争犠牲者数を上回るという研究が出されているなど、従来の平和創造の歴史は国家の平和にとどまり、必ずしも人々の安全確保のためではなかったことが問題視される他、伝統的な平和観の変容が指摘されています。国民統合が進まず政府の統治の正当性が確立されていない多民族国家や発展途上国では、外部脅威に加えて反対派や分離主義といった内部脅威が存在している事から、内部脅威への強権的な対応の帰結として戦争の犠牲者数を上回る程の多くの命が政府権力の手によって奪われるという人道的危機を発生させました。その背景には、武力行使が禁止され侵略戦争は減少した一方、国際政治での勢力拡張の様式が旧来の侵略や領土併合ではなく同盟国や友好国の数を増やす事に変化した結果、同盟国や友好国の内部で発生する非人道的行為が看過された事。核時代の黎明期に「平和共存」平和観が支配的になり、人権侵害を止めるための外交的圧力がかえって国際関係に緊張をもたらした核戦争にまで発展する恐れがある事から敵対する陣営内の人権問題への干渉は互いに控えねばならず、人権の抑圧等が看過せざるを得ない状況が出現した事が挙げられています。

今日までの平和論は軍縮・軍備管理による平和、戦争違法化による平和、経済国際主義による平和、相互信頼による平和、集団安全保障による平和などに分類されます。この他に二十世紀末に民主主義による平和論が考えられるようになりました。

戦争の違法化は国際連盟の設立を機に、不戦条約で戦争放棄に関する初の多国間条約が

成立し、第二次世界大戦後には国際連合憲章の武力行使の禁止原則へと発展しました。

国際連合憲章第二条第四項には「すべての加盟国は、その国際関係において、武力による威嚇又は武力の行使を、いかなる国の領土保全又は政治的独立に対するものも、また、国際連合の目的と両立しない他のいかなる方法によるものも慎まなければならない。」と記されています。

私たちが普段何気なく暮らしている地球上では、今もなお各地で戦争が相次いでいます。各国では「核兵器廃絶平和都市宣言」など様々な法が定められている一方で、戦争が治まらないのが現状です。自分自身が今何が出来るのか、どのような行動を取るべきか、政治経済を学習していく中で、現代社会の課題を注視しつつ考えていきたいです。

第20回平和の主張コンクール 佳作

唯一の被爆国が平和のためにできることとは

北海道釧路江南高等学校 2年 大場 康永

日本は唯一の被爆国であり、核兵器の脅威を一番よく知っている国だと思う。それなのになぜ、「非核三原則」や「原水爆禁止運動」のように主な活動区域を国内にとどめてしまったのか。今では、インターネットやSNSなどのツールがあるが、なぜもっと活用して世界へと発信しないのか。核兵器はこの世から廃絶するべきものであるのに。

なぜ核兵器がなくならないのか、まず考えられる理由の一つは、核兵器が「外交のカード」になってしまったからである。現在公に認められている核保有国はイギリス、アメリカ、フランス、ロシア、中国の五カ国だが、他にもインド、パキスタン、北朝鮮などが核兵器を保持しており、この中でも特に北朝鮮が大国の関心を集め、経済的援助を得ようと核兵器を外交のカードとしてふりかざしている。そして二つ目の理由が核兵器が抑止力となっていることである。北朝鮮は核兵器を使用する可能性は低いとされている。なぜなら核兵器を使用した場合他国が自国に核兵器を使用する可能性が非常に高いためである。

では日本は核兵器に対してどのように考えているのか。日本は唯一の被爆国であるはずだが核兵器禁止条約の交渉会議を欠席した。その背景として核の傘というもので守られている。そもそも核の傘とは核兵器の保有国が自国を中心に平和を維持することで、日本の場合、日米安全保障条約を結んでいるアメリカが核兵器を保有していることで安全が保たれている。次に二〇一九年の日本が提出した核廃絶決議案では、二〇一八年までの「深い懸念」という表現から「認識する」という弱い表現にとどめ、核兵器禁止条約にも直接触れることもなかった。なぜ核兵器の脅威を一番知っているのにも関わらず核の傘に依存してしまっているのか、それは核兵器の脅威を一番知っているが故のことなのかもしれない。だが、そこで安全を優先しすぎても、核兵器を廃絶させることは進められないため、危険であったとしても、核兵器の廃絶を進めるべきであると思う。それが世界で唯一の被爆国の責務であると思う。そしてこの世の平和を作ることの大きな一歩になるだろう。

ここまで話したことは国レベルの話だが個人が平和のためにできることは何かを考えていく必要があると思う。まず、核兵器に対する意識を高めることが大切だと思う。なぜなら被爆から長い年月が経っているため核兵器を軽率に考えている若者が多いという事実があるからである。次に平和な世界を創るためには自分には関係ないと考えず、まずは身近なことから始めることが大切だと思う。一人で大きな行動を起こすことは難しいけれど、自分の平和に対する思いを伝えていき、その思いが人に伝わっていけば、やがて世界を動かすような思いになると思う。世界中の核兵器がなくなり、だれもが安心して過ごせる「平和」な世界を望んでいる。

第20回平和の主張コンクール
佳作

平和について思うこと

北海道釧路江南高等学校 2年 虻川 朝花

あなたは、戦争をどう思うだろうか。私は、実際に戦争を体験したり、戦争を体験した方に話を聞いたりしたことはないけれど、思うことは沢山ある。

まず、戦争は、理解不能なほど意味がないことだと思っている。戦争に意味があると思っている人は、存在しているのだろうか。もしも、たったひとりでもいるのならば、世界平和なんて実現できないだろう。そして、私は、そんな人に、戦争に対する思いをもう一度考え直してみしてほしい。

私は、戦争をして対戦国に勝利したとき、どういった気持ちになるのか、思案してみた。数えきれないほどの人間や動物、自然を傷つけたり、殺したりして獲得した勝利に対して心から嬉しいなんて思えないだろう。そして、対戦国に敗北したとき、自分がどうして生きているのか、わからなくなってしまうと思う。どのような結果になったとしても、良いと思えることは何もないのだ。

そもそも、戦争の勝敗によって、問題を解決しようとするのがいけないのだ。互いの気持ちや考えを理解しようとしていないし、互いに納得することもできないだろう。私は、傷つけ合うことでしか解決することができない問題はないと思う。国同士が対立することで問題を解決するのではなく、国同士が互いを思いやることで問題を解決するべきである。実際に、このような機関もある。

あなたは、「国連」を知っているのだろうか。「国連」とは、「国際連合」の略称であり、第二次世界大戦を防げなかった国際連盟の様々な反省を踏まえ、設立された機関であり、現在は、百九十三カ国が加盟している。国際連合の目的は、「国際の平和と安全を維持すること。」であり、私は、「世界平和」という共通の目標をかかげ、沢山の国々が協力していることは、本当に素晴らしいことだと思う。そして、ここから、世界平和が広がっていくと思うと、嬉しい気持ちになる。

初めにも述べたとおり、私は、戦争に意味を感じている人が、たったひとりでも存在しているのならば、世界平和を実現することはできないと思っている。しかし、この地球のすべての人が願うならば、私は、世界平和を実現することができると思う。そのためには、互いに尊重し合うことが大切だと思う。「思いやりの気持ち」を持つことは、誰もが良いことだと思っているが、本当に難しいことである。しかし、新型コロナウイルス感染症の流行に、世間が脅かされ続けている今、私たちがマスクをつけることは「思いやりの気持ち」につながっていると思う。予防のためにと、意識的にマスクをつけているが、人々の安全のために、という「思いやりの気持ち」が無意識的に持たれているのである。

私は、この地球に住むすべての人々や動物が、協力し、支え合い、安全に暮らしていく

ことができる未来になってほしいと思っている。そのために、自分ができることは、何でもやりたいと思う。そして、ひとりでも多くの人々に、私と同じ気持ちになってほしい。

第20回平和の主張コンクール
佳作

私たちの未来のために

北海道釧路北陽高等学校 2年 鈴木 唯花

ガーナのカカオ農園で働く兄弟のビデオを見たことがあります。彼らは朝から晩までずっと、学校にも通わずに働いていました。自分達が採っているカカオがチョコレートに加工をされることも知らずに。私は彼らが言っていたことで印象に残っている言葉があります。それは、

「生きていくためには、働かなければならない。」

という言葉です。こんな言葉を、まだ日本であったら中学生にも満たない彼らに言わせてしまった原因は何なのでしょう。

それは、アフリカが植民地支配を受けていたことが背景にあります。戦時中からの発展が遅れているため、未来をつくっていく象徴である子どもたちが十分に育つ環境が整っていないのです。もしも戦争がなかったら、きっとこんな未来にはならなかったでしょう。

そもそも、世界の戦争の原因は、争っている国の欲望がぶつかり合ったことだと私は思います。日清戦争であれば、両国が朝鮮への影響力を拡大しようとしていたこと、第二次世界大戦ではドイツのヒトラー率いるナチス党がポーランドを奪還しようとしていたことが例に上げられます。欲望を持つことは悪くはありませんが、その欲望を叶えるために誰かを傷つけることは絶対に良いことではありません。日本も、戦争をしたことで現在まで残ったものは負の遺産しかありませんでした。ですから、もう二度とこの悲劇を繰り返さないために、日本国憲法の基本原理として、国の政治のあり方は国民が決める「国民主権」、国民誰もが人間らしく生きる権利を持つ「基本的人権の尊重」、悲惨な戦争を二度と繰り返さない「平和主義」を掲げました。

しかし世界では、日本でいう「平和主義」を掲げている国は少ないように思えます。日本は世界で唯一、原子爆弾の被爆国です。八月六日に広島市、八月九日に長崎市にアメリカ軍によって日本に投下されました。その結果、全体で二十四万人の人々が亡くなったといわれています。日本はこのことから「核をもたない、つぐらない、もちこまない」という三つの原則からなる非核三原則を掲げました。ですが世界ではどうでしょうか。現在、国際連合の常任理事国であるアメリカ、ロシア、イギリス、フランス、中国の五か国はすべて核保有国です。加えて、国際条約である核兵器禁止条約に反対しています。もし、核兵器が使えるようになったら、きっと水面下で国同士が脅し合うことが増えることになります。それは、平和とは言えないと強く思います。今日でも、朝鮮民主主義人民共和国がミサイルの発射実験を行うことで沢山の国の人々が怯えています。常任理事国の国の人々も変わりません。第一に、世界中の人々の心や身体の安寧を考えることが、今の世界の国々

にとって最も必要なことだと私は思います。

終戦記念日である八月十五日には、毎年、戦没者への追悼式が中継され、遺族の人々が祈っている姿を目にします。遺族の人々のことを考えると心が締め付けられる思いです。今の日本は、ご飯もたくさん食べることができ、不自由なく勉学に励むこともでき、自分の考えるまま行動ができる状況が整っています。それは、先代の日本の人々が、今を生きる私達のために築き上げてきてくれたからです。幸せなことだと本当に私は思います。そのことをしっかり理解して、私達も未来の日本に幸せを繋ぐために、これからを過ごしていかなければなりません。

それと同時に、今この瞬間、私達が幸せに過ごしている中で、ご飯も満足に食べられず勉強すらできずに懸命に働いている人がいることにも目を向けなければなりません。カカオ農園で働いている兄弟のような子どもたちが一人でも少なくなるように、私達にもできることはあると思います。ワクチンになるエコキャップ運動や、お金の寄附、フェアトレード商品を購入することなど方法はいろいろあります。

エジプトの国際法学者であったブトロス・ガリはある名言を遺しています。

「平和は待つて得られるものではありません。自ら築き上げるものなのです。」

他人に任せるのではなく、自分で考え、行動し、私たちの未来のために、平和を築き上げていきましょう。

第20回平和の主張コンクール 佳作

自分の考えをもつということ

北海道釧路江南高等学校 2年 増田 太陽

この現代の社会では、私だけでなく、何年も何十年、何百年と先の世代へと続く「平和」について叫ばれている。では、この平和とは一体何をもってして平和なのだろうか。またこれについて、私たちは具体的に何を行えば良いのだろうか。

インターネットの記事によると、平和とは「戦争」が発生していない状態、またそれだけではなく、社会的平等が保たれている状態と合わせたものであるということでした。これは人と人が、という話ではなく、国と国という世界規模の話です。私たちが目指さなければならぬのは国の平和より大きい国と国との平和などです。

今現在はどうでしょうか。国と国との平和に近づいているのでしょうか。残念ながら、未だに核兵器を保持している国は数多く存在しており、中には核兵器を含めたさまざまな兵器が開発されている国も存在しています。何故核兵器などの兵器を開発し続けているのでしょうか。それは国と国とが核兵器を持つことで互いに核兵器の使用をためらうという核の抑止力という物が働いていることを本で読んだことがあるのを覚えています。じゃあ全ての国が一斉に核兵器を破棄すれば良いのではないかと考えていました。ですが、核兵器というのはもはや手段の一つであるので、それを損失するようなことはしないのではないかとこの考えに至りました。

では、今私たちには何が出来るのでしょうか。その国に行って核兵器の保持をやめさせるなんて事はできません。よって、私たち学生が表立って出来ることは現時点でほとんど無いのです。だからこそ、私たちが世界の平和について出来ることは、世界平和についての自分の考えを持つことです。

自分の考えを持つということは、例えば今後の自分は平和のために何ができるか、恒久の平和のために何を望むかというように、後のこと、未来のことを考える、ということです。自分の考えをもった人々が増えると、平和ということへの理解が進み、いつかはこの世界を変えられると信じているからです。

ただ平和を願っているだけでは、未来の平和は訪れず、遠ざかってしまいます。今は何も出来なくても、いつか来るべき日のために、自分が後に出来ることを考えなければなりません。その為には、自分から調べたり、学ぼうとする姿勢が必要です。中身もなく漠然とした平和を願うのはあまり意味がないのではないかと考えます。日本以外の国について、核兵器とそれがもつ力と影響についてなど、知ると自分の知識が広がり、やがて自分はこう思うといった自分の考えが生まれるのだ、と考えています。

今も私はこの文章を書きながら、「平和」という事について考えています。いつか自分の考えをまとめ、いつか自分なりの行動をしようと思っています。

第20回平和の主張コンクール 佳作

利用される核兵器

北海道釧路江南高等学校 2年 黒田 栞那

一三四〇〇。これは二〇二〇年の一月時点で確認された核兵器の数だ。広島に落とされたものと同じ威力の核兵器が東京の中心に落とされると、その被害は富士山にまで及ぶといわれている。それが世界には一万個以上あると考えると、どれほど危険な状況であるかわかる。しかし、それにも関わらず、なぜ核兵器を何千、何百と所持している国があるのか。第二次世界大戦の惨禍から平和の尊さをわかっているはずだ。アメリカの前大統領のオバマ大統領が原子爆弾で亡くなった方々の慰霊碑に献花をしていた姿がとても印象的だった。近頃であれば、国際NGOは紛争をしているシリアやアフガニスタンなどの国の難民に物資を給付している。また、先進国のメディアではその現状を多くの人に知ってもらおうと、現地の子どもの写真やインタビューを放送している。このように国際的には平和に向けた取り組みを行っているのだ。だがしかし、私はそこに矛盾を感じる。

核兵器を所持している国々の背景には他国との悪化し続ける状況がある。加えて、最も多くの国に注意を払い、払われているのは世界を指揮する立場にあるアメリカであることも予想できる。まず、アメリカ以上の核兵器を所持しているロシアとの関係性だ。それは以前と比較すると改善されつつあった。ところが、今年の四月、ロシアがアメリカにサイバー攻撃を仕掛け、続けて五月にはプーチン大統領はアメリカを非友好国にしているのだ。この二か月に渡るロシアの動きはアメリカにとって、ひいては世界にとって衝撃的で不安を感じさせるものであった。次に北朝鮮についてだ。この国は、どのような危険な兵器を所持しているかわからない。その上、アメリカを意識し、核兵器の開発に打ち込んでいく。このことは、一切、平和を目指そうとしていないといえる。世界の方針に大きく逆らうものだ。北朝鮮のその行動をアメリカのバイデン大統領は「深刻な脅威」と表現している。さらに、中国との関係はアメリカのトランプ前大統領が非常に高圧的な態度を取っていたため、今後のバイデン大統領の行動によって、その関係性は変化する。このように、様々な国が核兵器を含み、複雑に結びついている。

核兵器は、人々に恐怖を与える脅しとして、つまり、護身用具として使用されている。さらには、核兵器を所持しながら、世界の平和を謳うということは背反が起きている。日本は唯一の被爆国として、その矛盾を世界に発信しなければならない。また、脅しに核兵器を使用するような、一つ一つの命を軽視する、前者の国々の姿勢を批判するべきだ。核兵器という脅しの存在を利用しても、解決すべき課題の状況は何も変化しない。言葉を交わし、妥協し合うことでようやく、解決されるものだ。核兵器は大勢の人の命を一瞬にして奪うことができるが、国の代表者をはじめとする世界の人々が心から平和な世界を望むのであれば、その利益は無意味なものだ。核兵器はもう棄てよう。

第20回平和の主張コンクール

佳作

平和とは

北海道釧路江南高等学校 2年 斎藤 静流

今も世界のどこかで戦いがおこっている。銃が使われる。核兵器が。

「平和とは何か。」この問いに対して胸を張って答えられる人は少ないのではないかな。私はこの問いに対しての答えはまだわからない。もっと言えば答えはないと思う。物の捉え方考え方、価値感は絶対一人一人違うから。ここから書くことは私の個人的な意見にすぎない。

今の日本は平和だと思うか。日常的にテロがおこるわけでもない、交戦権を認めていない。だから戦争・内戦もおこらない。確かに戦争がないということが平和とするのであれば平和だと思う。日本は今まで多くの戦争を起こしてきた。参加してきた。そして八月六日、九日。日本は唯一の被爆国となった。あの日原子爆弾を落とされたから平和的な国になったのではないかな。当時の人が心を感じたもの、目に焼きついた光景。今でも資料や原爆ドームといった形で残ってはいるけれど、実際、その場にいた人がどんな光景が見えたのか思ったのかそれは私たちにはわからない。なぜなら経験したことがないから。だからこそもっと知るべきだし、考えていくべきだと思う。戦争を経験していない世代が大半を占めるからこそ、平和に対しての考えが薄くなっているのは事実だと思う。もう一度考えるきっかけを自分からみつけるべきだと思う。日本だけを今までは見てきたけれど、すこし視点をズラしてみてもはどうだろう。アジアのパレスチナ自治区では空から降るものは雨や雪だけではない。当たれば命を落とす危険性だってあるものが降ってくる。他に今は戦争をしていなくても、核兵器を作りつづけている国がある、所有している国がある。表上では何気ない毎日が実は大きな危険性をもっているのではないかな。非核三原則「核をもたず、つくらず、もちこませず」この三原則を日本だけでとどまらず、もっと世界中に広めていくべきだと感じた。

そもそも人はなぜ戦争をおこすのか。相手が嫌いだから？嫌だから？相手に納得できないことをされたから？相手が気に入らないから？勝つことにする自己満足のため？自分が強いことを世界に見せつけるため？何か利益がほしいから？もう一度考えてみてほしい。なぜ戦争が起こるのか。戦争を起こすのか。その原因は戦いでしか解決できなかったのか。決してそんなことはないと思う。人は交渉することができる。話し合うことだって出来る。そんな中でなぜ戦うことを選んだのか。手を先に出してしまうのか。戦って勝ったとしてもその後のことは気にしないのか。多くの人の人生を奪い、町を失い、得る物、事の方が少ないのではないのか。

日本は、戦争を起こしている。そして唯一の原爆を経験している被爆国でもある。日本国憲法でも「平和主義」が明文化されている世界の平和を目指すには、日本から発信して

いくことが不可欠だと私は思う。